

テーマ「不登校を出さない学級づくり～コミュニケーションスキルを育むために～」

講師：長谷川 重和（神戸親和女子大学教授）

はじめに

県立但馬やまびこの郷に勤務していたとき、忘れられない思い出がある。入所初日のことだった、カウンセリンググループで悩んでいる生徒から話を聴く機会があった。話がなかなか進まないで、彼女が好きなイラストでコミュニケーションをとりながら遊ぶことにした。“幼いころ、心に残っている楽しいワンシーン”を私も一緒に描くことになった。「絵が上手下手とかは関係ないからね。自由に描けたらいいね」と、いうことで始まった。思い出すのに時間はかかったが、ワンシーンが決まると短時間で驚くほど上手に描き上げた。私の作品と比較にならないのは言うまでもない。その絵は、夏場に光がキラキラと木の間から輝いて、女の子が笑顔で万歳しているシーンであった。（ここはどこ？誰と一緒にいたの？なぜ心に残ったの？）と、聞きたいことがいっぱい湧いて出てきた。しかし、私はあえて多くの質問をしなかった。彼女は「ああ～あ、幸せ」とつぶやいて、次のイラストを描き始めた。この時間と同じ課題を共有することで目と目が合う回数が増えた。彼女の表情が和らいだと感じた。彼女は、入所期間中、私を見つけては楽しかった家族との思い出や友だちと遊んだことを話してくれた。あのとき描いた“万歳のシーン”は、分かり合う二人だけのエピソードとして、私の心に共感を持って焼き付いている。このやまびこの郷での経験は、「子どもの心に寄り添うとはどういうことか」「スキルを知ることが大事だが、どのように実践すればいいのか」というヒントを与えてくれた。

本研修は不登校を出さない学級づくりがテーマです。先生方が、エクササイズを体験することで、コミュニケーションスキルを知り、ご自身の心のシャッターを切りながら、不登校で悩んでいる子どもたちと心のチャンネルを合わせるヒントにさせていただきたい。

## 1 県立但馬やまびこの郷での実践から

### (1) 情報収集や観察などによる的確な状況把握

但馬やまびこの郷に子どもたちが入所する場合、「登校状況」「生活状況」等の情報は、事前にある程度知ることができる。予め把握している情報と照らし合わせながら、入所時の様子を観察することがある。「事前に聞いていた状況とは、やまびこの郷では随分感じが違うよね」という場合もある。だから、あえて資料を見ない場合がある。私たちは、子どもと心のチャンネルを合わせながら、感覚を研ぎ澄ませ関係づくりを進めていく。このような視点は、より良い学級づくりをしようとしている先生方も同じことだと思う。

### (2) 温かい声かけや寄り添い(傾聴)による人間関係づくり

入所してくる子どもたちは緊張感もあり、自分の方から積極的に話してくることはほとんどない。教職員は子どもの緊張感をほぐしながら、しっかりと寄り添い、傾聴して心的距離を少しでも縮めようとする。受容的・共感的な態度は、子どもの心や集団の雰囲気を変える大切なポイントになる。

### (3) 変わってきたことや気づきへの肯定的な声かけ

副所長から「子どもたちは入所後、変わって家に帰っていく」との話があったように、そうした変化を子ども自身に知らせていくというフィードバックが大事である。自分自身の変化には、なかなか気づかないものである。

初日に「出会いの集い」、最終日に「お別れ会」があり、「自分は変わった」と感じさせていく場面を作る。友だちや職員から「こういう風になんか変わってきている」ということを聞き、入所前の自分と様々な体験をした後

の自分が変わっていることを知る。このように肯定的な変化をしている自分に気づかせることで自信の回復に繋げている。

(4) リーダーと子どもの関係から、子どもたち相互の人間関係へ

リーダーとは場合によって異なるが、教員、指導主事、研修員、大学生ボランティア（メンタルフレンド）を意味している。子どもと1対1の関係から始まり、子ども同士のつながりを広げていく関係へと徐々に繋いでいる。

## 2 「成長し続ける教師」の視点から

(1) 自分の成長を受け止め、ポジティブに子どもとの関係を維持することができる。

但馬やまびこの郷には「カウンセリングルーム」に箱庭がある。人形や模型などを並べ、子どもたちの自己表現や、心の中で思っていることを表現させている。最初から「気持ちを投影しなさい」とは言わず、遊びの中で様々な思いを描かせ、作らせていく。私は臨床心理士ではなかったが、子どもと一緒に遊びながら楽しんで取り組んだ。

(2) 教師自身が自己理解しながら他者（他の先生等）とのよりよい関係を築くことができる。

保護者とのカウンセリングの中で「先生、カウンセリングの資格あるのですか?」と聞かれたことがある。唐突な質問に、「持っていないけど勉強はしている」と申し訳なく応えたが、保護者は納得しているように見えなかった。その時の上司と相談して心理士の資格を取ることにした。資格取得が、保護者や子どもとの関係にどのように影響したかは分からないが、より良い関係づくりに活かそうとしたことは事実である。しかし、今言えることは、但馬やまびこの郷の職員やスタッフは心理士資格の有無よりももっと大事なことを日々実践していることである。各スタッフが持っている経験や温かい人柄から醸し出す言葉がけが、子どもたちの信頼を得ている。子どもたちは自分を見つめながらより良い人間関係を築こうとしている。このことは、より良い学級づくりをしている教師にも言えることである。

(3) 教師と子ども、子どもたち相互の関わりの中でお互いに成長し続ける。

ア ノンバーバルコミュニケーション(スクイグル、鉛筆対談)

カウンセリングルームでは、ほとんど会話しない子どももいる。そんなとき私が一方的に話さないで「一緒に落書きのようなお絵かきごっこしようか」と話を持ちかける。クルクルとした線をじっと見て、「何かに見える?」「ここに何かを描いてみようかなあ」なんて二人で遊びながら模様や絵を描く。不思議なもので会話をしなくても完成形に近づいてくる。振り返ってみると、途中まで二人の思いは違っていることが多い。「この時はこんな思いだったよ」「これは〇〇だと思っていたけど・・・、違うね」と振り返りながら話す与会話になる。そして、二人で相談しながら完成した作品にタイトルを付けたりして額に入れると、みんなの関心を集める。「共同作業する喜び」という学びに繋がっていく。会話はしないが、「相手が何を考えているか」ということを想像したり、描いた後に様々な表情を見せ合ったりしながら、生まれる“間”が何とも言えない楽しい雰囲気醸し出す。

イ ポイント

(ア) 相手を受け入れる。:否定せず、気持ちをくみ取っていく。

(イ) 様々な作業をさせる。授業のようにねらいをあえて伝えない。体験後、ねらいを話して納得できたら良い。

(ウ) 開始前に“何も言葉を使わない。無言です”ことを伝える。:「しゃべりそうになっても我慢できるかな」

「ニコッとするくらいはいいよ」等 このようなエクササイズは、カウンセリングという限られた場面で実施してきたが、学級集団で実施することができる。私は「心の学習」と名付けて教育課程に位置付けて実施したことがある。この場合は、計画的に学習課程を決めるなどして“構成的”な条件や環境を整えることにしている。

### 3 学級づくりにおける教育的グループワークでの遊び（スクイグル）

#### (1) 指導のポイント

ア 学期始めは児童生徒主体の活動で盛り上がり、学級の雰囲気を変えることができる。

スクイグルは、年度初めの学級開きに適している。“会話せずに二人組になって描く、時間は15分間、完成した作品はみんなに見てもらおうよ”と説明して描き始める。制限時間がくると、子どもたちは「もう少しで仕上がるのになあ」と思い始めるため、「今度、仕上げしよう。色鉛筆を持ってきてね」と伝える。

イ 計画的な教育活動である。

「続きからスタートします。タイトルはつけたよね?」と言って、そのタイトルになった理由を書かせる。絵の完成形に加え、「どんな気持ちでスタートしたか?」「途中で二人の思いは違っていたね。」「最後まで描き上げたね」などと、メールのようなやりとりを鉛筆対談で残す。これが子どもたちにとってコミュニケーション力を培う学習になる。

約束通り完成した絵を教室の後ろに貼ると、子どもたちは熱心に見ている。そのため、誰と誰の作品であるかが分かるように名前も記した。月日も書かせておくことがポイントである。「4月〇日に〇くんと〇さんの作品だよ、楽しさが伝わってくるね」と子どもたちの心の中に残る。「次週は参観日、お家の人にも見てもらおう・・・」と年間行事計画と学級づくりを合わせて意味ある活動として位置づける。

ウ 振り返り、発表、聞き取りによって子どもたちの相互理解を深める。

「こんな面白い会話をしていたよ」「感性がすごいね」などと、子どもたちの相互理解を深めるとともに、家庭訪問でも堅苦しい雰囲気を和らげることができる。「家に犬がいるでしょう」→「先生、娘がかわいいがっているのです」→「ロさんが描いた絵にいつも犬が出てきますよ(笑)」等・・・。

先生と子どもの心のパイプがこうしたスクイグルからより太いパイプになっていく。保護者にも「子どもの絵を見たい。先生が一人一人の心を見つめてくれている。そこまで理解してくれている」といい影響が広がる。

#### (2) 結果として

ア 教師の観察力が高まり、子どもたちに対して適切な対応ができるようになる。

スクイグルを計画的に残していく。1、2、3学期とポートフォリオにしていくと、「子どもの思いがスクイグルに表現されている。成長のひとつが見えたのでは」と観察力が高まる。教師にはそんな感性が大事である。単なる絵遊びから、心の動きを意識させるような学習を展開していくのである。

イ 教師と子どもたちとのコミュニケーションが取りやすい雰囲気になる。

私はこの15分間モジュールを、エクササイズを使った“心の学習”と呼んでいる。時間は延長しない。子どもたちにどのように感動させ、心を引き出させることができるか?いわゆる心の“見える化”である。他のゲームも工夫して「心の学習」にしていく。こういうことができる教師って素晴らしいと思う。

### 4 新学習指導要領から

特別活動は勿論、教科指導や道徳教育の中に「学級経営」という視点が入ってきている。より良い学級づくりのひとつとして「“認め合える雰囲気”を先生が創っていかなくてはいけない」としている。

#### (1) 主体的な学び、対話的な学び、深い学び

今日の研修のスクイグルを振り返ってみると、初めて出会った先生同士で交流したが、互いに認め合おうとする雰囲気が伝わってきた。相手を受け入れ、自分も表現し、意欲を高めようとする場面が見受けられた。相互評価もされながら自分自身の心の動きも見つめられていた。

それが学級づくりになると、子どもの主体的な学びは、計画的にポートフォリオに残していかないとなかなか評価できない。たとえば「心の学習」は、対話的な場面が多く自己理解や他者理解などの気づきに繋がって

いる。子どもたちは、ポートフォリオを見て「4月の頃と比べ、3学期は変わってきた」「僕はこんな風に変わってきたと思う」と自分の成長を自己評価する。そしてこの活動が自己肯定感や自尊感情の芽生えになるなど深い学びに繋がっていく。1年間のスパンで友だちや先生と一緒に成長を見つめていくことになる。

## (2) ファシリテーターとして

「〇さんはこんな気持ちになっているよ」「違う意見の人もいるのでは?」というように対話的な学びに介入し、支援・サポート、ファシリテートしていく立場に近づく。多様な考えを認めていく中で、何が大事かを見つけ、焦点化していくのである。そうすることで、子どもたちが言葉で伝えるだけではなく、多様な表現を認めていくことに繋がる。

“どんなことを学んだ”という感想を書かせる機会も出てくる。書くことが苦手、なかなか表現できない子には、イラストやマンガで吹き出しを使って表現させたりする工夫も必要である。心の学習では、「文章表現のみに偏らず、多様な表現の仕方を認めていく」ことが重要である。

## (3) 課題解決的な学習

「道徳的行為に対する体験的な学習」では、「疑似体験的な内容を通し、実際の問題解決する方法を探りなさい」と言われている。

### ア トラブルから集団による問題解決へ（ロールプレイを活用した解決）

学級でトラブルが発生することがよくある。当事者を呼び両方の話を十分に聞いてから、「今のトラブルを劇にしよう」「みんなと一緒に考えよう」と言って、もめた状態そのままを演じさせる。演じるうちに、その場を見ていた子どもたちはどこに問題があるか分かるようになる。次に「トラブルにならないでうまくいく場面も演じるのだよ」と伝え、二つの場面を考える。

### イ よりよい学校生活をおくる特別活動として

みんなの前でトラブルの内容をオープンにし、「こんな問題がありました。この解決を理想のかかわりにするには、どうすればいいか?」「劇にして説明する。終わりの会までにその解決の仕方を考えよう」と伝える。「学級としてどうするの?」「あなたは見ているだけ?」「みんなで一緒に考えよう」と展開していく。ここまでは特別活動での内容であるが、普段から劇化の仕方など段階的に指導することが必要である。これも「心の学習」や「不登校を出さない学級づくり」の考えとリンクする。

### ウ 学校全体で取り組む道徳教育として

“心の学習”では先生方の工夫が必要となる。構成的グループエンカウンターに関する書籍などを参考に「これはいける。学級づくりに活かせるな」と思ったらまず実践してみる。「子どもが楽しく学べそう」とか「難しいが、やりがいがある」と感じたら、基本的なルールを徹底して学び、その意味を理解する。この学級にあったエクササイズを試行錯誤しながら子どもと共に創り上げる。そのようにして初めて一つのエクササイズができあがり自分のものになる。

子どもたちに伝えたい“ねらい”は必ず持たなければならないが、振り返り(シェアリング)をすることで子どもの中から“ねらい”に気づかせることが肝要である。教師がねらいを一方向的に語ることはあまり意味がない。

### エ 不登校を出さない学級づくりは子どもと共に楽しみながら創る

“集団になじむ”にはそれぞれの子どものペースがあり、約8割は集団で行動しているが、不登校で悩んでいる子どもたちはなかなかそのペースにはついて行けない。その子のことを理解しながら寄り添うことが大切である。授業の中だけでは難しいので、“心の学習”のような時間をとり、先生とコミュニケーションを図ることである。

## おわりに

教職を選んだ以上、子どもと関わりながら「成長し続ける先生」になりたいものである。成長し続ける先生は、

「学級づくりが上手い先生」だと思う。学級づくりの上手い先生の特長は、自分が悩んでいるとき他の先生方に分かってもらえるような関係性を築くことができる先生である。人間関係を円滑にするスキルを身につけている。自己理解して他の先生と折り合いをつけながらより良い教育環境を創ることができる先生である。自分の成長に対して肯定的にフィードバックできる先生である。

成長し続ける先生は「この先生に話ししてよかった」「一緒にいると楽しい。安心する」と子どもや同僚の先生方から思われている。國分康孝先生の傾聴の五技法を使って子どもの気持ちに寄り添ってみる。いわゆるカウンセリングマインドとしての聴き方ができる先生である。

本日は多くの先生方と様々な思いを語る事ができた。先生方のコミュニケーション力は、大きなパワーを秘めている。今、不登校に悩んでいる子どもたちにそのお力を発揮してほしい。今日のエクササイズをヒントにしたちょとした試みが、この子をより良く変えることになる。